読売歌壇

小池　光　選

娘ではないから言える初恋のはなしを「ヘルパーさん」吾は聞く　新宮市　小野小乃々

【評】誰にでもわが子には言えない話というものがある。むしろ他人になら、話せる。やさしいヘルパーさんになら、話せる。ヘルパーさんにはこういう役割もある。

ラグビーを見慣れたころにサッカーを見ると全員痩せて見えるな　高砂市　今井　慎一

【評】スポーツによって選手の体型、体格はおどろくほど変わる。ラグビーはごつい上にもごつい。サッカーはスマート。これを全員痩せて見える、というところがおもしろい。

ポンポンポンリズムにのってゆったりとまわしを叩く巨漢「高安」　上尾市　関　行男

【評】高安は毛深い体質。それがポンポンとまわしを叩く。その明朗なるひびき、大相撲観戦の楽しみのひとつ。

何といふ事もなけれど先をゆく僧の頭にどんぐりの落つ　東大阪市　山本　隆

人生に私は何を残せるか　食べれば残る枝豆の殻　守口市　小杉なんぎん

りいんりいん難聴の耳に虫の鳴くもう一度聞くそばだてて聞く　四條畷市　松岡　裕子

息子から結婚するとライン来ぬ　夏のをはりの雨降る夜更け　仙台市　岩間　啓二

汗だくの草との格闘勝負あり抜きて十日目びっしり若草　兵庫県　和泉　純子

啄木の歌に魅せられ七十年つひに訪ひたり青柳町を　平塚市　与田　博司

教室に入れば子どもがわれに言うスーパームーンきのう見たよと　仙台市　三角　清造

栗木　京子　選

おや蜻蛉いつの間にやら数を増す空に隙間のまだあるようだ　我孫子市　森住　昌弘

【評】中村汀女の「とどまればあたりにふゆる蜻蛉かな」を思い出させる情景。空間には隙間があり、そこから蜻蛉が湧き出るという発想が新鮮。初句の呼び掛けも軽やかだ。

思い出す初徒競走うろこ雲テープの下をくぐりぬけたり　神戸市　渡辺　孝子

【評】幼い頃に初めて出た徒競走。ゴールテープを切ることを知らず、テープをくぐってしまった。せっかく一着だったのに。作者の思慮深い性格が想像できる歌である。

広大な森を制した蜩が二寸足らずの屍になる　山形市　柏屋　敏秋

【評】鳴き声で森全体を覆っていた蜩。今は命を終えて、小さな存在になっている。「二寸足らず」という数値の表現が印象深い。

ラグビーを見ながら食を摂る我は大歓声の時舌を噛みたり　常総市　渡辺　守

不本意な英検の成績を壁に貼る三方ヶ原で敗れた家康の気持ちで　東京都　青山　繁

稲妻に触ってみたいと手を伸ばし叱られる子はあの頃の僕　大洲市　城戸　通宗

街路樹を紅葉させる秋風が抹茶ミルクの水面撫でけり　福岡市　竹田　晴香

楡の木のことば聞かむと幹に寄るそこには風も虫も来てをり　岐阜市　後藤　進

替え芯をすこし太めにとりかえて今年二度目の暑中見舞かく　昭島市　杉山　尚

窓を開け小雨の粒を手にうけて今日も事なくひと日暮れゆく　横浜市　芳垣　光勇

俳　万智　選

死亡日をどの書類にも書かされて母は夫を何度もなくす　千葉市　芍　薬

【評】つらい日にちを何度も書かされる母。そのたびに、夫の死を念押しされるような気持ちになることだろう。その辛さを簡潔に表現した結句が胸に迫る。

文末に魔法の杖の絵文字あり初めて杖を持った母より　越谷市　鳥原　さみ

【評】初めての杖は魔法のようだと、喜びが絵文字から伝わってくる。杖をつくのは身体の衰えゆえだが、それをポジティブに表現したところがいい。

飲み物がお飲み物へと変わる空いつもと違うアップルジュース　守谷市　久保田洋二

【評】お飲み物はと聞かれれば、いつものリンゴジュースが澄ました飲み物に。空の旅のウキウキ気分が、ジュースにうまく託された。

君の住む島に生まれた台風が名古屋の僕の自転車飛ばす　小諸市　藤　雪陽

たいせつなものは両手で包むのさ哺乳瓶からためしてごらん　上尾市　関根　裕治

来世なら鮭になろうよ二人して深いところで待ち合わせてさ　室蘭市　柏倉未知佳

スーパーの駐輪場にキャベツ一つもとからそこに生えていたように　オランダ　宮沢　洋子

豆形のアイマスクに涙を吸わせジャックみたいに空へ逃げたい　延岡市　矢野優理恵

かんむりを掲げて曼珠沙華の花土手いっぱいに畦いっぱいに　市原市　井原　茂明

おーえすおーえすおーえすおーパソコンからSOS聞こえる夜　宇都宮市　羽石　美春

黒瀬　珂瀾　選

生くべしと吾にささやく秋風や明石海人の書を閉じて聴く　東京都　小出風沙子

【評】ハンセン病者として命の困難と輝き、そして幻想の力を歌集『白描』で歌い上げた明石海人。その力が現在の生きる力であると作者は言う。時を超えて詩歌は命を繋ぐ。

スーパーの秋刀魚はどれも細くして幼子描くさんまは太し　枚方市　秋岡　実

【評】温暖化の影響だろう、不漁が続く現在だ。しかし幼子は自らの知る魚の姿を描く。幼子たちの次世代に豊かな自然を伝えるには、今の私たちの節制が求められている。

寂しさはこんな形でやって来る炎鵬の出ぬ秋場所なんて　船橋市　鳥畑　泉

【評】推しの力士がいない本場所は、なんともさみしい。「炎鵬」という四股名からも、火の消えたような寂しさが醸し出されます。

足踏みの秋を横目に紅芙蓉涼気潜めてやさしくひらく　豊前市　中村　澄枝

部屋に心腐らす老を連れ出して実りの秋へ道草を食う　京丹後市　鉄林　篤

病床のカーテン越しに看護師のデータ入力の指のかげ踊る　相模原市　古川　睦子

ただ一度父と登りしみちのくの松茸山の滝壺の音　町田市　小堀　正伸

もう足がないと知らない白百合の反った雄蕊を順々に切る　朝霞市　桐島　あお

経験が生んださやかな自尊心打ち崩しゆくITの波　和歌山県　川端真由子

秋の夜に流星ひとつ見つけたり妻の長生きただ祈るのみ　豊後高田市　藤延　秀則

◇投稿規定◇　はがき1枚に未発表の1作品。住所、氏名（ふりがな）、電話番号を明記。◇他の媒体、選者への二重投稿は厳禁です。選者が添削することもあります。〒103・8601、日本橋郵便局留、読売歌（俳）壇、○○先生（希望選者名）係または読売新聞オンラインから　◇毎週月曜日に掲載　右の影絵はたつたがわもんよう